



# 科学の眼

まなこ

発行: 姫路科学館 (〒671-2222 姫路市青山 1470-15 電話: 079-267-3961)  
<http://www.city.himeji.lg.jp/atom/>

## 生物シリーズ

今年、注目必至!?<sup>う</sup>の卯年にちなんだ海洋生物  
海の中のウサギたち

姫路科学館 学芸員 相楽充紀

新年明けましておめでとうございます。干支も、寅<sup>とら</sup>年から卯年に変わりました。耳が長くピョンピョン跳ねるウサギは良くご存知でしょう。海の中にもウサギと名のつく生物がいます。本号では、今年、注目必至の海の中に生息するウサギをご紹介します。ちなみに卯は、英語表記では飼いウサギを意味する“rabbit”ではなく、野ウサギを意味する“hare”を主に指し、卯年は“the year of the hare”と訳すことが多いようです。

### ■ 「ウミウサギガイ」の分類と形態

軟体動物門 腹足綱 中腹足目 ウミウサギガイ科に属し、学名 *Ovula ovum* 標準和名はウミウサギガイです。海産の巻貝で、殻は長卵形で肉厚、殻高 8cm 前後まで成長します。殻の表面は、純白色で光沢を放ち、滑らかで陶器に似た質感です。表面の純白色に対して、殻口内は赤紫色で殻内部は茶色をしています。近縁の貝類としてタカラガイ類がいます。

通常は殻から黒い外套膜<sup>がいどうまく</sup>を広げて外からは殻を見ることが出来ません(写真1)。その外套膜も真っ黒な下地に星をちりばめたような模様で、ミニプラネタリウムの観があります。

しかし、その外套膜につつくなどの刺激を与えると、スルスルと黒い外套膜をしまいこみ始め白い殻が現れます(写真2)。最後には外套膜をすべて殻の内部にしまってしまい(写真3)、真っ白な殻がむき出しになります。

### ■ 「ウミウサギガイ」の生態

主にサンゴ礁域に分布し、ウミキノコ類などのソフトコーラルを食べます。雌雄異体で4~5月が産卵期です。



写真1 通常のウミウサギガイ

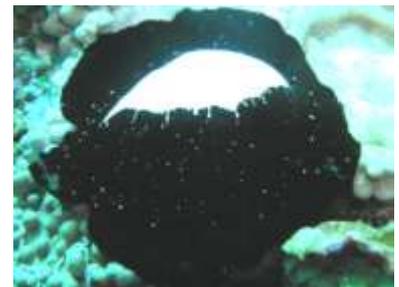


写真2 外套膜をしまい始める



写真3 白い貝殻が現れる

## ■ 「ウミウサギガイ」の利用

ウミウサギガイは英名“Egg cowrie”（卵タカラガイ）といます。鶏が卵を産んだ後、産んだ卵と交換にこのウミウサギガイの殻を抱卵させ、偽卵と利用するそうです。

昔、太平洋の島々全域で、アクセサリーや船首の飾りに使われていたそうです。現在は、沖縄で潜水漁や刺網で観賞用・飼育展示用として漁獲され、活魚イケスに入れられて魚市場でセリにかけられます（写真4）。



写真4 魚市場のイケスに並ぶ

## ■ 英名“Sea hare” 「海の野ウサギ」という海洋生物

英名に目を転じてみると“Sea hare” 「海の野ウサギ」と呼ばれる海の生物が北海道を除く日本各地に生息しています。さて、どんな生物だと思いますか？

答えは、標準和名アメフラシ(写真5)です。中国ではこのアメフラシを「海兔」と呼んでいます。

アメフラシの頭部に筒状に巻いた一対の耳状の触角があり、その耳状触角が野ウサギを連想させたのでしょう。

アメフラシは海産巻貝です。しかし、殻は小さく薄く退化し軟体部背中側の内部に埋没して、外からは見えません。貝殻を背負ってないのですが巻貝の仲間なのです。



写真5 アメフラシ



写真6 アメフラシの卵塊

冬場から海藻を大食してどんどん大きくなって、全長 30cm 超に成長することもあります。そうめんを丸く形付けたような卵を産み、その卵の色形から、海ぞうめん(写真6)と呼ばれます。春先に岩場や波打ち際で見られ、海ぞうめんを産んで1~2年で一生を終えます。つつくと紫色の液を出すことでも知られています。雌雄同体です。

ちなみに、食用にされている標準和名ウミゾウメンは、海藻の一種でベニモズク科の紅藻を指します。アメフラシの卵と同名ですが、全く別の生物です。

## ■ その他に標準和名にウサギの名が入る海洋生物

北海道以北のやや深い岩礁域や転石帯には、体長 75cm に達する大型種の「ウサギアイナメ」が生息しています。刺網で漁獲され、塩焼きや煮つけ等で賞味されます。

海にも干支の卵を冠した名前の生物が生息しています。ウミウサギガイの殻は、科学館ミュージアムショップに並ぶ予定です。ぜひ実物をご覧ください。海の中のウサギをテーマに標本に触れることのできる、科学館の「自然のおはなし会」も予定しています。

アメフラシや海ゾウメンは姫路市内の小赤壁の岩場や福泊の海岸で 3~5 月に観察可能です。今年は海のウサギを探しに、ご家族で磯の生物観察に出かけてはいかがでしょうか？